

S-CNC NEWS LETTER Vol. 24

Seto Inland Sea Carbon-Neutral Research Center

2026.3



センターの動き

2026年1月10日～13日

温暖化が問いかける瀬戸内の養殖業—「危機」を肌で学ぶ総合演習
「瀬戸内海の養殖水産物を学ぶ総合演習」報告

附属施設での教育活動

近年、温暖化の影響により、瀬戸内海の養殖業は深刻な局面を迎えています。海水温の上昇により、アイゴなどの植食魚類が増加して摂餌期間も長期化し、藻場の消失が進んでいます。そのため、餌場を失ったチヌがノリを食べるようになったとされ、実際、養殖ノリの3分の2程度が食害に遭った生産者もあります。カキについても、2025年夏に高水温が150日以上続いたことが引き金となり、大量斃死が発生しました。

このような養殖業の現状を肌で感じる機会として、2026年1月10～13日に水産実験所等において「瀬戸内海の養殖水産物を学ぶ総合演習」を実施しました。本演習は大学間単位互換事業の一つとして2013年より続いており、今年度は北海道大学・京都大学・関西大学・福山大学から6名の学生が参加しました。

カキやノリなどの観察やレトルト食品の加工実習に加え、広島県栽培漁業協会・田島漁協・安芸津漁協を訪問し、職員や漁業者の方々から直接お話を伺いました。参加した学生たちが、養殖業の課題解決について自ら議論を深める姿は、こうした学びの場を続けていくことの意義を改めて感じさせてくれるものでした。

本演習は、生物生産学部の教職員（併任含む）の、和田茂樹教授、羽倉義雄教授、加藤亜記准教授、豊田賢治准教授、柴田淳也助教、仲井敏技術職員が担当しました。



文責：加藤 亜記（ブルーイノベーション部門，水産実験所）

海の上の空気を測る

岩本 洋子 准教授

ブルーイノベーション部門

広島大学 大学院統合生命科学研究科

研究分野:大気海洋化学

研究キーワード:大気エアロゾル、大気海洋物質循環、
エアロゾル-雲相互作用

研究概要

大気中にはエアロゾル粒子と呼ばれる目に見えない微粒子が浮遊しています。地球表面の約7割を占める海洋は大気エアロゾル粒子の重要な発生源であり、その一部は雲核として機能し、気候に影響を及ぼします。海洋を起源とするエアロゾル粒子には、海水に取り込まれた気泡が大気海洋境界で破裂することで生成する波飛沫粒子があります。波飛沫粒子は、海水成分に加えて、気泡や大気海洋境界面に濃集しやすい有機物を海洋から大気へ輸送する役割を担っています。

気象海象や海洋生態系が動的に変化するときに、波飛沫粒子の量や質が変化し、その変化が粒子の雲核能力にどのような影響を及ぼすのか。この問いに答えるために、瀬戸内海や西部北太平洋を観測対象とした大気観測を通して海洋大気中のエアロゾル粒子やその雲核能力の時空間分布を把握します。また、実験室や観測船をプラットフォームとした波飛沫粒子生成実験により、粒子の雲核能力を左右する具体的な環境因子を探ります。

研究相談、共同研究など大歓迎です

〒739-0046 広島県東広島市鏡山1丁目4-4

センターホームページ: <https://s-cnc.hiroshima-u.ac.jp>

E-mail: seto-carbonneutral@hiroshima-u.ac.jp

[編集・発行]

広島大学 瀬戸内CN国際共同研究センター